
短編(四)まどか マギカ二次転生小説導入

tismo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編（四）まどか マギカ二次転生小説導入

【Nコード】

N0944BA

【作者名】

tismo

【あらすじ】

魔法少女まどか マギカ二次小説転生物

転生者多数

プロットとしては

主人公が転生者大虐殺

主要キャラは全員ハッピーエンド

狂気

テーマは沙耶の唄って所かなあ

神との対話

「在り来りな話をしようか」

静かな声が響き渡る。

暗い部屋にただ一人俺はいた。

何故ここにいるのかは何一つわからないと言うのに、不思議なことに焦る気持ちも疑問もない。

ただぼんやりと虚空を見つめていると、その声は響いてきた。

「君は死んだ。在り来りなことにね。簡単な話だ。鉢植えが落ちてきた。鉢植えの中身は時期に合ったポインセチア。赤い花は星の形。流れ星が君を殺したといえ、中々在り来りでない話だ」

甚だどうでもいい話だ。

そして、俺はどうでもいいような原因で死んだのか。

トラックに撥ねられて無残に死ぬわけでもなく、幼女を庇ってヒーローのように死ぬわけでもなく、戦争の中で当然のように死ぬわけでもなく、平和な世界で突発的に起きた偶然に殺された。死に贅沢はないが、せめてもう少しまともに死にたかった。

「ま、神たる私が殺したのだがね」

前言撤回、中々運命的な死に方だ。

神に殺されるだなんて、歴史の大海を見渡しても他にそうはあるまい。

ま、一応聞こうかな。

「何故俺を殺したんだ？一応俺は普通に家族がいて普通に友達がいって中々良い成績で学校生活を過ごしている普通にどこにでもいる学生でしかなかったんだがな。何か俺の前世なんかに恨みでもあったか」

「いや、単に趣味だよ」

「は？趣味？」

「君は蟻の一生に興味があるかい？」

いきなり、何の話だ？

呆然と立ち尽くす俺を置いて話を続ける神。

「君はいつも公園を通って登下校するね。小学校中学校高校、今年で11年になるかな？君は必ずその公園を通っている。その中で君は蟻を数匹踏み殺しているんだよ？」

はあ？なんだそれ？

「君は蟻に悪いと思ったことはないだろう？蟻にも一生があると言
うに君は一生を奪っておきながら何も感じない。やれやれ君は悪い
子だよ」

「たかだか蟻の数匹だろう？しかも事故みたいなもんじゃねえか。
悪いと思うが……まさか、それで俺は死んだのか!？」

「いや、違うよ」

「じゃあ、何なんだよ。今の話は!？」

「まあまあ、落ちつきなよ。要するに、だ。私にとっての君達人間
も、君達にとっての蟻とそう変わらないのだよ」

……………つまり、は。

「別に君達がいくら死のうと、どんな理由で死のうと、誰が死のう
と、興味はないのさ。どんな一生だろうと、どんな性格だろうと、
どんな境遇でも関係ない。気まぐれに私は殺すよ。人間をね」

「…………じゃあ、俺はお前の気まぐれに殺されたのか？」

「そうだね。そういうこと。ま、強いて理由を言うなら、蟻を殺したから、かな」

「なんだよ、それ…………俺の命は蟻と同じ価値ってことかよ…………」

「ふふつ。『蜘蛛の糸』って知ってるかい？」

「……………今度は何だよ。また、くだらない話なのか……………」

「くだらないだなんて酷いなあ。私はとっても楽しいのに。まあ、私はね太宰治の『蜘蛛の糸』がね」

「いや、芥川龍之介だろ」

「ありゃ、そうだったけ？まあ、どっちでもいいよ」

「お前本当に神かよ」

「まあまあ、でね『蜘蛛の糸』ね、私は実に神というものや人間というものの実像を写しているのだと思うのだよ」

「……………は？」

「だってさ、仏は、多くの人間を害し時に命まで奪った罪人に対して情けをかけるんだよ。たった一匹の蜘蛛を助けた、だなんてつまらない理由でね。罪人はね、火を放って罪なき人の命を多く奪った。罪人はね、物を持たない人から更に物を奪って間接的に餓死させた。罪人はね、死ぬまで罪人であり続けた。それなのにたった一つの気まぐれで殺さなかつた蜘蛛を理由に情けをかけられるんだ。つまりさ、神は罪人に殺された人々なんてどうでもいいけど、蜘蛛さんは大切だから蜘蛛さんを殺さなかつた罪人を助けてやろうかなニヤリって思ったわけだよ。実に面白いよね」

「……………歪んでやがる」

「いったいどうやってたらそんな考えになる。そんな目的である小説は作られたわけじゃないだろう。」

「だからね、私はその真似をしたんだ。蟻よりも軽いその命、君は実につまらない理由で死んだんだよ。ちなみに在り来りな話、君の書類にコーヒー零しちゃってねー、ごめんなさーい」

心が籠ってない。悪意が何ひとつない。歪んでいる。何もかもが歪んでいる。なんだよこれ悪夢か。

怖い。

「ま、実際人間を気まぐれに殺すのが趣味で君を殺した。私は神だから、君達生み出したから、殺すのも自由。怨まないでね、憎まないでね、私は悪くないし、誰も悪くない。強いて言えば、君の運が悪く悪い」

笑い声。神はこんなに不快なものなのか。

「さて、オタクな君にははたまた在り来りな話だが……転生とはどう思う？」

「ん、ああ………実に在り来りだね」

「いや、それを聞きたいわけではない。君はしたいかね？」

「別に……」

「興味ないのかい？チート転生とは厨二の醍醐味に近いだろう。君

はあれかね、今流行りの『チートしたくないのですう』なアンチな人なのかね？」

「ん？いや、転生するならチートは羨ましいよ。バカバカしいとは思っけれど、もらえるなら貰わないと損だろう？無料より安いものはないし、俺だって何度もチート転生な想像はしたさ」

「じゃあ、何故、転生しようと思わないのかな？」

「はあ」

溜息をつく。なんてくだらない質問なんだろう。もはや生に興味はない。

神は恐ろしく、世界は遊び場、誰も逆らえない箱庭と知って俺は清々しくは生きれない。

「単純な話だよ。俺は物語の中の主人公にはなれない。あんな前衛的な奴らが主人公ってだけで可笑しいんだ。二次転生小説なんてそれだけでギャグだ。俺はこのまま死んでいいよ。」

こんな神の下で生まれ変わっても悲惨なだけ、何もかもを忘れたい。

「駄目駄目だよ。君には転生してもらわないと、そして、君には

主人公になつてもらわないといけないんだから」

「何でだよ……このまま死なせてくれよ」

「君には他の転生者達を殺してもらおうと思ってるからね。期待してるよ。大丈夫、君の勝ちは確定的だよ。だってそうだろう。主人公は勝つんだから」

ふと、

俺が誰か思い出せなくなった。

何で？

俺は誰だ？

暗い部屋は白くなっていく。

脈動する。世界は赤く籠の中。

胎動する。回りは水と泡の中。

「君にはチートをあげるよ。ふふふ。君は東方は好きかい？私が考えた最強の能力！『再生を操る程度の能力』、それをあげよう。とつても便利さ。ま、あとはチラホラ。私の加護があるから君が他の転生者には殺されないし、適度にがんばれ」

俺の記憶の中の彼も彼女もあの場所もあの家もどこかに流れて、洗われていく。

家族は暖かったかな？友達は良いものだったかな？恋は難しいものだったかな？

「君の転生する世界は魔法少女まどか マギカ、悲劇を良い方向に変えなよ。転生者は沢山送るから、じゃんじゃん殺してくれ。ちなみに送られて来る転生者達にはチート10個ずつあげちゃうからさ、厄介かもねー」

ああ、流れていく。

「それじゃ、ハブアナイスライフ」

舞台裏

「さーて、今回も楽しみだなあ。どんな戦いになるんだろう」

私は手元に置かれていたコーヒーを間違っつて零す。

「あ、間違えちゃったー（笑）」

書類が染みになっちゃったよ。

誰かが警察官に銃で撃たれて死んだ。

誰かがどこかの内乱で政府軍に撃たれて死んだ。

五人くらいトラックに轢かれて死んだ。

三人くらい溺れて死んだ。

「仕方ない。転生させちゃうか。うんうん。仕方ない仕方ない。」

そして、私は彼等呼んだ。

「在り来りな話をしようか」

2 転生者 磨霊仕草（みがたま しぐさ）

つまらねえ話だ。

俺様は転生という人生の節目を迎え、くだらない物語の世界に入り込んだ。

魔法少女だかアラジンだかは知らねえが、とりあえずまどかだかマホトマだか変な名前のアマを助けなくちゃならんらしい。

しかも、女となって、だ。

回りには俺以外に9人のガキ共が居て、俺様と同様に死に偉大なる神に呼び出されていた。

神は言った。『来たる世界の情報はくれてやる。偉大なる力もくれてやる。好きに生きる。刺激的に生きる』

毎日神に祈りを捧げ、時に食事をぬき、貧しい者達に施しを与えたかいがあつたというもの。

偉大なるムハマド如く、神の啓示を受けるとは思わなかった。

回りはやけに騒がしく興奮しているようだが、無理もない。神の声を直に聞いた。それだけで感無量だろう。

ああ、神は俺様の善行をご覧になっていてくれたのだ。新たな世界でも善行を積み、より神に近づかねば。

とは言え、だ。

生まれ変わって見たら、社会は安寧で人々は腑抜けきり、ジャパんだかアンパンだか知らねえが、実に面白みがねえ。

革命しろよ。

政治や経済が順調に歪み始めてるっつーのに何の反応もねえ。日本っつー国はあれか？平和で頭はいい中々優れた国のくせにキタマは潰れてんのか？根性がねえ。

俺様を見習え。国軍に喧嘩売ってぶっ殺されたんだぜ？

歪んだ社会に一石を投じて死んだんだ。お前らはのうのうと生を過ごして楽しいのか。チキン共が。

それにせつかく神の御技を頂いたっていうのに、活かせねえじゃねえか。

刺激的に過ごさないと神の啓示に従えねえだろ。

まあいい。

ま、可哀相な羊を救うのが今生の目的だ。

魔法少女まどか マギカ、だっけか？

全部神によって預言されたが。

ふん。あの猫に似た侵略者め。まるで政府のやり方だ。くだらない事ばかりぬかして肝心なことはいいやがらねえ。まるで悪魔だ。異境の怪物め。滅ぼしてやる。

最後は鹿目まどかが偉大なる魂となることで救いになったみたいだが、クソツ、やはり納得がいかねえ。

特に美樹さやか。

あいつは助からないのか……。

せめて恋だけでも恭介に対する成就させなくてはならん。

他の連中がどう動くかわからんが、魔法少女とやらを救ってやる。それが神の意思なればな。

俺様は見滝原中学校に通っている。

朝4時に起き、いつも通り神への感謝の祈りを捧げた後にストレッチやら何やら日課をこなして、シャワーを浴びて登校する。

通学路は赤やら青やら緑やらばらばらの色を持つ、お前らの血は何色だ？とツツコミたくなるような髪色で彩られている。

実にキモい。

そういう私も銀髪なのだが。

まあ、それはこの世界の神の趣味が悪いのだろう、と納得して騒がしい通学路を歩いていく。

そして、いつもの場所で奴を待つ。

来た。

「よ。仕草^{しこう}。相変わらず早いんだね。実に良いことだ」

「ふん。貴君が遅いのだ。5分前行動が神の定めた戒律だ。」

「いや、それは違っただろう」

苦笑しながらこちらに近づいてくる。時間は……相変わらず正確過ぎるほど正確。遅くもなく早くもない、まさにピッタリだ。

奴の名前は 笠原^{かさばら} 箆女^{かきめ}

若草色の髪と目の同級生だ。

幼少の頃からの親友であり、中々粋な娘だ。

生前であれば、娶りたいほどの聡明で気の利く奴だ。

だが、残念。今の俺様は奴と同じく女の身だ。

神の戒律によれば、同性での色事は重罪。

俺様は女として良き夫を見つければならんが、やれやれ、今から難儀な話だ。

「それじゃ、早く行こうか。ゆっくりし過ぎたら遅れてしまっよ」

「そうだな。行くか」

視界の端に仲よさ気な四人組の女子を捕らえる。

鹿目まどか。美樹さやか。志筑仁美。そして、転生者であろう恐山茜^{おそれやま あかね}

恐山、か。接触する必要があるか。
余計な衝突は避けたいところだ。

そろそろ、侵略者共が介入してくる時期か。
やっと、つまらない話は終わりってことだな。
腕が鳴るぜ。

神の名の元に、革命だぜ。
ベイビー。

「仕草！。何やってるんだ！。早く行くぞー」

「あー、わりいな。今行くぜ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944ba/>

短編(四)まどか マギカ二次転生小説導入

2012年1月2日11時52分発行